

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：44413

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23700960

研究課題名(和文) 幼児期における自然教育の歴史と展望：奈良女子高等師範学校附属幼稚園資料の分析から

研究課題名(英文) A practice of nature education of preschool children in Japan in early 1900s : From the date of the kindergarten attached to Nara Women's Higher Normal School

研究代表者

藤崎 亜由子 (Fujisaki, Ayuko)

大阪成蹊短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：50411690

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は奈良女子高等師範学校附属幼稚園(大正元年保育開始)の保育日誌等を基軸としつつ「生きものとの関わり」という視座をもって、幼児教育における実践の系譜を分析した。まず、保管されている全保育資料(大正から昭和初期の保育日誌や園籍、写真など)の電子化を行った。大正元年の保育日誌を分析した結果、当時より動植物を保育に取り入れ、子どもたちに実物を観察させることを重視する姿勢があったことが示された。昭和13年度の年長組の保育日誌の分析をした結果、保育者は子どもが見つけた生きものを題材として取り上げるなど、子どもと保育者と環境との協奏によって保育が展開されていく様子が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we analyzed early childhood education practice in regards to the involvement of animals and plants from the date of the kindergarten attached to the Nara Women's Higher Normal School. Recently, annual education diaries, pictures and attendance books were digitized. We analyzed the annual education diary written in 1912 and concluded that early education in the 1910s placed emphasis on having children observe animals and plants. From the date in 1924, it appears that education did not take place in a rigid, pre-set way, in which teachers taught the children according to a certain format, but rather was done in a way in which teachers used the animals and plants found by children as educational themes to explore. Teachers made sure they did not miss the chance to take advantage of the children's interest to educate them. This demonstrates that teachers and children collaborated in the educational process.

研究分野：子ども学(子ども環境学)

科研費の分科・細目：2451

キーワード：幼児教育史 自然教育 動物介在教育 保育内容環境

1. 研究開始当初の背景

本研究は日本の風土に根ざした自然教育法の提示を目的として、歴史的に重要かつ未だ深耕されていない奈良女子高等師範学校附属幼稚園(大正元年保育開始)の保育日誌等を基軸としつつ、「生きものとの関わり」という視座をもって、幼児教育における実践の系譜を分析する。

自然教育は環境教育の基盤であり、今日の幼稚園教育要領においても、領域「環境」などにその意義が明記されている。日本の幼稚園における動物飼育の歴史は古く、現在ではその普及率は9割近い(井上・無藤, 2009)。しかし、その実施率の高さというハード面での充実とは裏腹に、衛生管理や繁殖管理など多くの問題を抱えている(谷田・木場, 2004)。つまり、今日の子どもたちの教育の現場では、「生きものとのふれあいが子どもたちの知的発達や情操教育に重要な役割を担っている」という共通の認識はあるものの、ただ「大切である」以上に、それをいかにして進めてゆくかの理念や方法論は十分に確立されておらず、不都合が生じているというのが現状であろう。

現在、刻々と私たちと自然との関わりは変化している。現代に生きる私たちが失ったものは何なのか、得たものは何なのか、今後築き上げなければならないものは何なのか、それを明らかにすることが必要である。研究代表者は過去10年にわたり現奈良女子大学附属幼稚園で、虫やカメ、ウサギと子どもたちの交流について観察調査を行い、幼児の発達に果たす動物の役割について心理学の立場から探求してきた。その視点で、大正から現在にいたる奈良女子高等師範学校附属幼稚園の保育資料を読み解き、日本独自の自然教育のあり方を提言したい。(本研究では領域「環境」に限定せず、領域横断的に幼稚園での生きものとの出会いをすべて取り上げる。)

2. 研究の目的

日本の自然教育には長年の蓄積があるものの、近年の身近な動植物との交流の喪失、地球規模での環境変化、地域社会性をもった伝統文化の喪失などの状況に対応した理念や方法論は十分に確立されているとは言い難い。本研究では、保育実践の歴史を辿りつつ、現代的課題との差異分析を通して、今日の幼児教育の場における「生きものとの関わりをとおした教育」のあり方を提言する。

現奈良女子大学附属幼稚園は、国立の幼稚園として大正元年(1912年)に誕生し、以後教育・研究機関として日本の幼児教育の発展に寄与してきた。森川正雄(奈良女子高等師範学校教授兼同校附属幼稚園主事)は大正3年(1914)より着任し、その保育論は『幼稚園の理論及実際』として出版されている。森川は大正15年(1926)の幼稚園令で「観

察」という保育項目が初めて制定される以前に、幼児教育における「観察」を重視した実践を行い、特に動植物の飼育や栽培の重要性を説いている。だが残念なことにその森川理論の実践記録はこれまでほとんど知られることがなかった。なぜならば、奈良女子高等師範学校附属幼稚園の記録は、2010年になってようやくその一部が復刻されたのみだからである(高月, 2010)。本研究では、その貴重な資料のすべてを電子的に記録し、安定的に保存するという役割も果たしたい。

過去の日誌や写真から保育の実際を読みとる研究は、資料自体が乏しく非常に少ない現状にある。現存する資料の中で、例えば東京女子師範学校附属幼稚園(現お茶の水女子大学附属幼稚園)の記録は、倉橋惣三の記した書籍などで多く目にするができる。また、広島大学教育学部附属三原幼稚園の実践記録は、谷田・木場(2004)などにまとめられている。奈良は戦火をのがれ、過去の貴重な保育日誌等が保存されているという幸運にめぐまれている。その資料を読み解き、制度史や保育思想史だけではとらえることのできない保育の実際を辿ってみたい。

3. 研究の方法

1) 資料の保存: まず奈良女子大学附属幼稚園に現存する未公開資料を安定的保存のための電子化を行う。これは本研究の独創性を保証すると同時に日本の幼児教育史を補完する上でも貴重な資料となる。

2) 資料分析: アーカイブした資料をもとに、「動植物」が登場する箇所を抜粋しまとめる。その上で日本の幼児教育史と重ね合わせながら、奈良女大学附属幼稚園における自然教育の意義と変遷を辿りたい。

4. 研究成果

1) 保育資料のアーカイブ

本研究では、現存する貴重な資料のすべてをスキャンして電子的に記録し、安定的に保存するという役割を果たすことも目的の一つである。そこでまず、下記に示す全資料のアーカイブを行った。その電子資料は現奈良女子大学附属幼稚園に寄贈するとともに、奈良女子大学附属図書館のホームページにおいて一部を公開する手続きを進めている。

<アーカイブした保育資料>

写真 大正から昭和の時代の写真が3000枚ほど現存している。それらの資料をすべて保存した。子どもたちと動植物との関わりに関する貴重な写真も現存している。その一例を下記に示す。

寄附兔舎

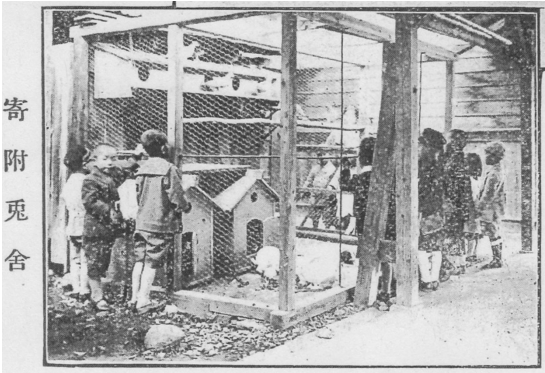


写真 1. 寄付兔舎



(壇花) 察観の虫昆や卉花
写真 2. 花卉や昆虫の観察 (花壇)

保育日誌 (各組につき 1 年間で約 230 頁)

保育日誌は、一日一頁 (B5 程度の大きさの用紙) で綴られていた。用紙は縦に区切られ、左側にその日の「予定」が記入され、一方で右側には保育の「実際」が記されていた (図 1 参照)。下記の資料はそれぞれの年度の組毎に年間約 230 頁で構成されていた。

- 保育日誌 大正元年 貳組
- 保育日誌 昭和 13 年度
 - 一之組、二之組、三之組、四之組、
 - 五之組、六之組、七之組
- 保育日誌 昭和 14 年度
 - 一之組、二之組、三之組、四之組、
 - 五之組、六之組、七之組
- 保育日誌 昭和 15 年度
 - 二ノ組、四之組
- 保育日誌 昭和 16 年度
 - 五之組、六之組
- 保育日誌 昭和 17 年度
 - 二之組、年長組 (組は不明)
- 保育日誌 昭和 18 年度
 - 四之組、七之組

園籍簿 (各組につき、約 30 名ずつの記録)

図 2 は、園籍簿の一例である。氏名、住所、家族構成などの基本的情報の他、身体検査の結果 (身長、体重、胸囲など) や、精神の発達の様子その他、年度によっては、性格、知能検査 (数、色、形の認識など)、食物の好き

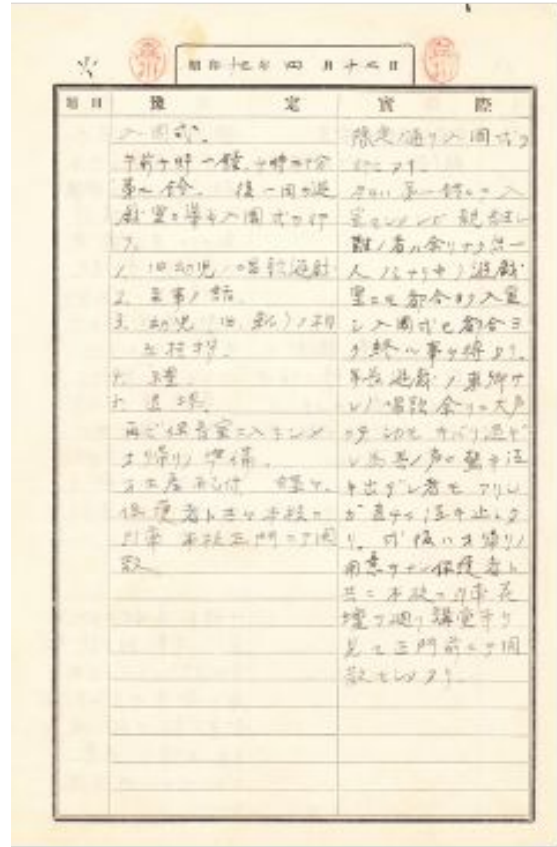


図 1. 保育日誌の一例

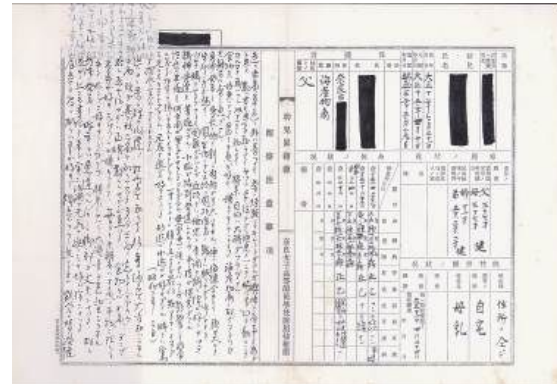


図 2. 園籍簿の一例

嫌い、将来の目的などの調査結果が記されていた。

- 園籍簿 大正元年
- 園籍簿 大正 5 年 三之組
- 園籍簿 大正 6 年 一之組、四之組
- 園籍簿 大正 7 年 二之組
- 園籍簿 大正 8 年 二之組
- 園籍簿 大正 9 年 一之組、二之組、三之組、
- 五之組、六之組、
- 園籍簿 大正 10 年 年長組 (組は不明)
- 園籍簿 大正 11 年 一之組、三之組、五之組
- 園籍簿 大正 12 年 二之組、三之組、五之組、
- 六之組
- 園籍簿 大正 13 年 一之組、二之組、三之組、
- 五之組、六之組
- 園籍簿 大正 14 年 四之組

園籍簿 大正 15 年 一之組、二之組、三之組、
四之組、五之組
園籍簿 昭和 2 年 一之組、二之組、三之組、
四之組、五之組、六之組、七之組
園籍簿 昭和 3 年 一之組、二之組、三之組、
四之組、五之組、七之組
園籍簿 昭和 4 年 一之組、二之組、三之組、
四之組、五之組、六之組、七之組

うなみの園生

(後援会発行の記録) B5 の半分程の用紙 100 頁強ほどの分量で作成された後援会発行の会報誌である。奈良女子高等師範学校附属幼稚園規則や後援会会員の名簿、附属幼稚園の沿革及概況などが記されており、当時の園の概要を知ることが出来る。また、当時の保姆や園長、保護者代表の記事が掲載され、当時の幼稚園での保育の理念や實際をうかがい知ることの出来るものである。

年代：大正 13(1924)年～昭和 17(1942)年 1 巻、3 巻、4 巻、5 巻、6 巻、7 巻、8 巻、9 巻、10 巻、11 巻、12 巻、13 巻、14 巻、15 巻、16 巻、17 巻、19 巻、20 巻

その他

- ・家庭訪問録_大正 2 年 9 月
- ・学級通録_保母養成科
- ・規則規程類綴
- ・研究調査物_昭和 28 年
- ・研究調査物綴
- ・三ノ組幼児個性調査_大正 14 年度
- ・子じか新聞_昭和 26,27 年
- ・視察報告書綴
- ・退園に関する書類_大正 1 年～昭和 22 年
- ・退園幼児園籍簿_大正元年十月
- ・第 18 回保母養成科生調査簿_昭和 13 年卒
- ・第 19 回保母養成科生徒調査簿
- ・保育研究参考資料_年中行事
- ・保育研究参考資料_遊戯及玩具
- ・保育修了式記録_昭和 23 年
- ・保母科生家庭調査書_昭和 16 年
- ・保母養成科生_第 19 回保母養成科生徒調査簿_昭和 13 年
- ・保母養成科生記録_昭和 12 年
- ・保母養成科生徒身元調査書_昭和 14 年
- ・母の会幹事会
- ・幼稚園会
- ・幼稚園改正要目案 など

2) 大正時代の自然教育の実際

現存している大正時代の資料は、大正元年の「保育日誌」と大正 4 年にまとめられた「保育課程要目」そして、大正 13 年に創刊された後援会の機関誌「うなみの園生」(大正時代のものは、大正 13,14,15 年が現存)である。「保育課程要目」は、森川主事が就任する以前の大正時代の保育の實際をまとめたものと考えられる(高月, 2010)。本研究ではまず、「保育課程要目」を参考にしつつ、「保

育日誌」の中から動植物が登場する箇所を抜粋し分析を行った(表 1)。

表 1. 保育項目別 動植物名の登場日数
(1 年間 115 日中)

	動物	植物		動物	植物
躰方	2	2	排べ方	11	3
唱歌	14	17	貼り方	1	6
遊戯	2	4	豆細工	0	13
談話	11	2	摺三方	5	2
画キ方	6	6	繋ギ方	0	3
積三方	4	2	合計	56	60

* 同日の同じ保育項目に 2 種類の動物が出てきた場合 1 と数えた。

資料 1 壱組(大正元年) 115 日分の記録

日誌は二年保育年少組のものであり、躰方、唱歌、遊戯、談話、画キ方、排べ方、貼り方、豆細工、摺三方、繋ギ方、積三方に区分され、予定と實際が記録されている。最も動植物の登場回数が多いのは、唱歌である。次いで排べ方、談話、豆細工と続く(排べ方と豆細工、繋ギ方は、それぞれ貝と豆と麦藁が材料として使用されている)。動物や植物を題材とした歌やお伽噺は多い。そのような文化的題材として使用する際にも、実際には剥製や模型、時には実物を持ってきて観察したり、生態の説明を加えていた。例えば、談話「蟹ノ横這ヒノ話」の場合、実物の蟹を見せ、「蟹ニ関スル話ヲナシ後、コレヲ池ニ放チシニ熱心ニ其形態生活ノ状況ヲ観察シ」とある。

資料 2 うなみの園生(大正 13, 14, 15 年)

大正 13 年(1924)の創刊号には、寄附兎舎と寄附禽舎の写真が掲載されており、會報には、「小禽舎設置」小鳥舎 1 個、小鳥 25 匹、鳩舎 1 個、兎舎 3 個、金魚水槽 2 個、白鼠 1 個、「植物栽培」植木鉢 250 個と記されている。大正 14 年、15 年にも継続し、水槽や動物舎の寄附や修繕が行われている。後援会の副会長白井英三によると、「昨年は動物週期として子供達の最も喜ぶ動物を収集飼育する事に努力することとなった」(大正 14 年)そう、具体的な動物種として鳥(鳩、インコ、文鳥、カナリア、ホホジロ、金バラ、セキセイインコ、銀バラ、紅雀、その他)、リス、小猿が飼育されていたと記されている。小猿は、「最も愛嬌があり一番子供達を嬉しがらせてゐる」そうである。また、大正 14 年度には大阪市立動物園へ、大正 15 年度には京都の岡崎動物園へ電車を乗り継いでの観察旅行も行われていた。

白井英三(同上)は、「當後援会将来の希望」(大正 13 年)の中で、植物園の拡張、動物愛護の奨励を唱え、子どもたちに実物を観察させることを重視した保育を求める姿勢

が伺える。

3) 昭和初期の自然教育の実態

昭和13(1938)年度の年長組、合計5組の保育日誌を読み解き、昭和初期の自然教育の実態を定量的かつ定性的側面から明らかにした。当時の組構成は、2年保育年少が計2組、2年保育年長が計2組、1年保育年長が計3組の合計7組で運営されていた。本研究では、年長5組分の保育日誌を分析し、領域横断的にすべての保育要目および遊びの中で動植物が登場する箇所を抜粋した。そのうえで、動植物を実物と非実物に区別した。実物とは実際に動植物と出会ったことを意味し、非実物とは生物が現前せず行われる説明や図画等の題材、談話(擬人化された動物が登場する話など)を意味する。なお、同じ日に2種類の動物が登場した場合でも、登場日数としては「1」と数えた。動物と植物が登場した場合には、それぞれに動物「1」、植物「1」と数えた。

保育要目別の動植物の取り扱い

当時の園では、保育要目は談話、遊戯、手技、図画、唱歌、観察6項目であった。保育要目「観察」を中心とした豊富な記述によると、幼稚園では、蚕や兔、金魚などが常時飼育され、時には子どもが連れてきた栗鼠や各種虫(蛭、蝸牛など)が飼育されていた。集計の結果、平均3日に1日は動植物(実物)に接する機会があった(平均67日、全登園日の28.5%)。

園外保育も積極的に行われていた。園外保育では、近接していた奈良女子高等師範学校の農園に苺狩りや芋掘りにでかけたり、果樹園や温室の植物、豚を見学したりしていた。奈良公園や田圃にはよく出かけ、虫とりや草摘みをしていた。園外保育は、予め保育案をたてて行くことがほとんどであったが、時には天候の都合などで急遽出かける自由さもあった。

田圃では稲や麦などの作物を観察し、稲は、稲こき、苗代、田植、成長、稲刈り、稲束干、麦(麦)は、麦まき、刈り取り、成長、製品など季節の変化を意識した観察がなされていた。また、軍馬や軍用犬、伝書鳩など、戦争に関する動物も登場した。また年に1回は動物園にでかけていた。

「談話」では、擬人化された動物が登場する物語が多く取り上げられている。浦島太郎、因幡の白兔などの日本の昔話から、羊と狼、蟻とキリギリスなどの西洋の話も取り上げられていた。物語に登場する動物だけでなく、軍用犬などの実際的な談話から、蛙、金魚、稲など、観察と談話が融合しながら展開されているものもあった。例えば、四ノ組11月12日(土)では、実物の柿を観察しつつ、掛図、実物を用いて観察談話をしたとある。また一ノ組6月20日(木)では「お池からつかまへた亀から浦島さんを思ひ出しお帰りの時話をなす」とある。さらに朝顔などは全保育要目にわたり登場し、1つの題材をめぐって総合的な保育が展開されていたことが伺える。

指導法に関しては、「虫の触覚の話」(四ノ組11月7日(月))、「花青素、葉緑素を取る実験をなす」(三ノ組9月20日(火))のように、保育者主導の場合もあるが、基本的には「自由に観察しカマキリの顔が三角だと笑っていた」(一ノ組9月16日(金))とあるように、幼児の主体性が尊重された。時には、「お帰りの時、とんぼが部屋に入ってきたので、とんぼの生長(ママ)のお話をなし」(五ノ組10月5日(水))とあるように、偶発的な事象も取り入れて保育者ごとに柔軟に保育が展開されていた。森川は「適応方案」という、設定(教師中心)と自由(子ども中心)を兼ね備えた保育を提案している。このような理論を基礎として、指導者ごとの随意的観察が実施されていたと考えられるだろう。その時々を逃さず、子どもと保育者と環境との協奏によって保育が展開されていく例を事例1に示す。

事例1. 二ノ組5月21日(土)の園外保育
おたまじゃくし取りの罫や網がうれしくて手を離せない。半数の幼児は持参してみなかったもので、小さい筆洗ひのバケツに入れ合ふ事にして早速用意して出掛けた。佐保川に沿って法蓮の方に向ふ。途中、つばめの飛ぶのを観察。鳴く声を聴いて幼児は揃って歌を歌って喜んだ。百姓家の前で親鶏とひよこがピヨピヨ遊ぶ様を見て立寄って見る。ヒヨコの歌が又歌ひ出される。材木屋のお父さんが皮を剥いて白木にしてあるのも面白く見る。豆、麥等観察しながら急いで田圃に出た。細い路を一行でよく気を付けながら進むともうおたまじゃくしがあるといふので大喜びだ。想像した様に易く取れない。網に入って呉れないので不平顔であったが、だんだん上手になり、僕がすくへたとか、何匹とれたとか面白がって遊ぶ。三名が片足を水にはめて濡したが怪我はなかった。始め育英の裏辺りで取り、帰り途、ちゃん[児の名前]の路案内で、本校の西の田圃でも取った。蛙を取らうと努力してみたが網が小さいので取れない様だった。十一時二十分頃帰園し。帰宅準備をして、おたまじゃくしを観察し、罫を持参した幼児達は大事におたまじゃくしを入れて持帰った。

組による違い

組毎に比較した結果、組による動植物の取り上げられ方の違いが明らかになった(表1)。特に差がみられたのは「実物の動物」であり、一番多い一ノ組で32日、最も少ない三ノ組で15日であった。また、三ノ組は「実物の植物」を取り上げる日数も比較的少ない。その一方で、「非実物の植物」に関しては比較的多く取り上げるといった特色があ

表1. 1年間の保育日誌に動物及び植物が登場した日数

(1年間の保育日数: 一・二組は236日: 三・四・五組は233日)

	一ノ組	二ノ組	三ノ組	四ノ組	五ノ組	平均登場日数
動物:実物 (虫)	32 (15)	28 (13)	15 (5)	28 (10)	22 (11)	25 (11)
植物:実物 (朝顔)	48 (4)	55 (6)	46 (4)	61 (8)	50 (9)	52 (6)
動物:非実物 (虫)	81 (10)	102 (10)	77 (12)	74 (7)	86 (6)	84 (9)
植物:非実物 (朝顔)	44 (2)	44 (1)	56 (5)	53 (4)	55 (5)	50 (3)

注. (虫)・(朝顔)は、それぞれ動物(実物・非実物)、植物(実物・非実物)の中で、虫や朝顔が登場した日数を示す。

った。同じ日数と時間の保育の中で、何を題材として選び展開していくのかは保育者にゆだねられている部分も大きい。保育者の好みや自然観の反映が、動植物の取り上げられ方に組による違いが見られることは興味深い。この結果は、過去の日誌を読み解く保育実践史研究において、ある特定の組における実践の記録が、その園の普遍の実態を必ずしも示すわけではないことに留意する必要があることを示している。

4) 今後の展望と課題

本研究は、資料のアーカイブという役目を果たせたことは大きな成果である。その上で、大正及び昭和の資料の一部を分析することができた。しかし、全資料の分析は終了していない。今後の課題である。さらに、現代の保育との差異分析を通して、幼児教育の場における「生きものとの関わりをとおした教育」のあり方を提言することを目的としていたが、理論構築は不十分である。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

藤崎亜由子. 動物の「ことば」に対する幼児の理解の発達. 発達・療育研究, 京都国際社会福祉センター, Vol127, 3-17. 平成23年11月

藤崎亜由子. 昭和初期の幼稚園における自然教育の実践: 奈良女子高等師範学校附属幼稚園(昭和13年度)年長組の保育日誌の分析から. 大阪成蹊短期大学研究紀要第11巻(通巻51号). 83-102. 平成26年3月.

〔学会発表〕(計4件)

藤崎亜由子・麻生武. 「好きな生きもの」調査から探る幼児の生物理解. 日本発達心理学会, 第23回大会, 247. 於: 名古屋国際会議場. 平成24年3月9日.

藤崎亜由子. 奈良女子大学附属幼稚園資料からみる大正時代の自然教育. 日本保育学会第65回大会, 487 於: 東京家政大学. 平成24年5月2日

藤崎亜由子. 昭和初期の幼稚園における自然教育の実践: 奈良女子高等師範学校附属幼稚園(昭和13年度)年長組の保育日誌の分析から. 日本発達心理学会第25回大会, P2-052. p249. 平成26年3月21日.

藤崎亜由子. 子どもの将来の夢(1): 大正時代の保育資料から. 日本保育学会第67回大会. 平成26年5月17日(発表予定).

〔その他 講演など〕(計2件)

藤崎亜由子. 幼稚園における生きもの教育. 帝京科学大学公開講座「こどもトピック」. 平成24年5月2日

藤崎亜由子. 子どもたちが動物から学ぶこと: 異質な他者との出会いという視点から. 帝京科学大学公開講座「こどもトピック」. 平成25年5月1日

〔図書〕(計1件)

子ども問題事典(ハーベスト社)の3-8「生きものとの交流」を担当した. 平成25年7月

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤崎亜由子(Fujisaki Ayuko)

大阪成蹊短期大学児童教育学科幼児教育学専攻 准教授

研究者番号 50411690